モノグラフ

みんなで持ち寄った「おかね」の展示

近藤 雅樹（こんどう まさき）
本館民族文化研究部

両替商の看板（H213159）をメインに据えた会場の様子

今春、三月二〇日（木）から九月三〇日（火）にかけて開催した企画展は、従来とは少し趣が違っていた。「いろんな『おかね』で世界がみえる」というこの企画展のために、民博の教職員とその家族の人たち約四〇名（匿名出品者を含む）が、さまざまな国や地域の通貨をわんさかと持ち寄ってくれた。こんな展覧会ができる博物館は、楽しい。

みんなが持ち寄ったその数は、硬貨一九〇〇枚と紙幣二〇〇枚（ともに概数）。その大半が、出国前に両替できずに持ち帰った小銭か、あるいは「旅の記念に」との思いを込めて持ち帰った人たちから提供されたものだった。だから、直接手渡しながら「終わったら、お願いだから必ず返してね」と、念を押す人たちもいた。「長期の海外赴任が多かった父が遺したものなの。アフリカのおかねがたくさんあるよ」と言って、それらを一晩かけて国別に選りわけてから届けてくれた人もいた。そんな同僚と家族の方たちに感謝、感謝！

さて、整理を始めてみると、なかには二ューヨーク市内の公共交通機関を利用したときの専用コインや、ブラジルで使った公衆電話専用コイン（国内用と国際用の二種）も含まれていた。また、若干だが、ユーゴスラヴィア王国の硬貨など、二度の世界大戦のあいだに建国・滅亡した国々の通貨もあった。大日本帝国時代の紙幣と南方戦線に展開していた陸海軍の軍用手票（略して「軍票」とよんでいた）も、かなりの枚数があった。しかし、ユーロ発行を記念して発売されたコインアルバム一冊（オランダ製、一二ヵ国×八種類＝九六枚の収納用）以外、コレクション目的の「おかね」は一枚もなかった。それなのに、これだけの枚数が集まった。うれしい悲鳴！

サポートしてくれた情報企画課のスタッフにも感謝しなければ。

シンガポールのコインがやたらと多くて驚いた。他の国の通貨でも重複が多く出品しなかった例もあり、申しわけない思いをした。わけても、ベトナムに成立し、一時はラオスとカンボジアを支配した阮王朝（一八〇二～一九四五年）時代の銀の延べ棒と豆銀を、警備上の不安から出品できなかったのはつらかった。

インドネシア共和国・ギニア・台湾・バヌアツ・パプアニューギニアなどの貝貨コーナー（館蔵品）

ともに完形品で、延べ棒はずっしりと重い。一九世紀末期にフランス領インドシナに組み込まれるころまで通用していた秤量貨幣だったのだが…。残念！

展示には、民博が所蔵する大小の石貨と陶貨、代表的な貝貨であるハナビラタカラガイなどの標本資料も添えた。むかしは世界各地で貝貨が通用していたことを知っている人は少なくないはずだ。でも、紐で連ねた粒のそろったタカラガイや、ビーズ状に均等成形した無数の小さな貝殻を、これまた数え切れないほど幾重にも連ね束ねて太いドーナツ状にしたものを眼前にして、即座に「銭形平次」の銭緡（ぜにさし）を想起した人は、何人いただろう。また、世界各国の有孔硬貨との共通性に気がついた人は…。

現代人がイメージしている「おかね」とは、まったく姿かたちが異なる「おかね」があることに興味を惹かれた観覧者は多かったようだ。会場では、タイ王国の賭博場で遣い走りに与えたチップだったという陶貨も人気があった。サカナ、カニ、チョウなどに型抜きした表面に彩色を施したものが「わー、かわいいー！」と、こちらは素直に喜ばれたのだと思う。アンケート結果からは、紙幣のデザインに国情や風土性、また民族社会の伝統が映しだされていることを再認識した人の多かったことが読み取れた。アフリカ諸国の紙幣の多くに、政治家や軍人など偉人の肖像画ではなく、一般人の生活風景が描写されていることに新鮮な感銘を受けたという内容の回答も少なくなかった。

じつは、民博には、藩札が多数眠っている。世界各地の古銭・古紙幣もあれば、一部の国々の現行通貨が標本として登録されている例もある。民族学博物館だから、祖先祭祀に不可欠な紙銭も当然所蔵している。「銀行ごっこ」用の玩具紙幣や、演劇の小道具である「金塊」なども所蔵している。しかし、これらを展示に使うことは避けた。

この企画展は、貨幣制度の研究成果でも、体系的・網羅的なコレクションの紹介でもなかった。いや、そのような構成にはしなかった。学校の春休みと夏休みの期間を取り込んでいたのである。館の方針としても、とくに、夏休みの自由課題（宿題）を抱えている子どもたち・保護者たちに対するメッセージの発信が可能な展覧会の企画・実現が期待されていた。そこで、大勢が持ち寄って築きあげる共同制作に思いいたった。それが、この展示のコンセプトだった。

それともうひとつ、別の動機があった。わたしは、童心にかえって遊ぶ楽しさを、仲間を集めて実践し、確かめてみたくてこの企画展をした。集め、並べてみて、はじめてわかる「発見」がある。そのときの心境を確認したかったのだ。新しい研究が芽生える瞬間を実験的に作りだし、そのときの感動を実感し、リフレッシュしたかった。

この企画展の実現に協力してくれた同僚たちとサポートしてくれた大勢のスタッフに篤く感謝する。

マダガスカル共和国の住民は、10世紀ごろに東南アジアから移住してきた。この1000フラン（アリアリ）と500フラン（同）は旧札。物価変動のため、同じ額面でも新旧価値は異なり、旧札の1000フランは、新札の200アリアリに相当する（個人蔵）

ブラジル共和国の紙幣。50レアル札にはジャガーの一種オンカが、20レアル札にはリオデジャネイロ周辺にのみ生息するゴールデンライオンタマリンが描かれている。表はともに女神ブラジル（個人蔵）

タイ王国、おもに華僑が経営する賭博場でチップとして通用していた。ピア貨という陶製貨幣で、近代国家建設に活躍したラーマ5世の時代、20世紀初めごろまでのもの。館蔵品117点（H126438～126554）のうちの一部